

「シドニー便り 2. 0」(第14回)

～ シドニー湾攻撃慰霊式典 ～

6月5日

6月1日及び2日、シドニー湾攻撃の慰霊式典に参加しました。

6月1日はオーストラリア海軍主催、2日はニューサウスウェールズ(NSW)州議会議員のイニシアチブによる式典でした。

最も印象深かった点を最初に申し上げると、いずれの日も、多くの御高齢の退役軍人から声を掛けられ、一緒に記念撮影を求められ、日本総領事の参加を感謝されました。着任以来、これだけ多くの写真撮影を求められた行事は記憶にありません。先の大戦で敵国として戦った関係にある日豪両国ですが、今回の一連の行事で寄せられた、式典参加への温かな歓迎と和解の想いに、心から感謝し、それを成し遂げた先人たちの努力への深い敬意を新たにしました。



1942年5月31日から6月1日にかけて、旧日本海軍の特殊潜航艇3艇がシドニー湾に進入して攻撃を行い、豪州海軍「クッタバル」号が沈没、豪州軍19名と英軍2名の計21名が犠牲となりました。特殊潜航艇の乗員6名も戦死しました。攻撃された「クッタバル」号は宿泊用船舶であり、特殊潜航艇の当初の目標は、近接して停泊していた米軍巡洋艦の「シカゴ」号であったと言われています。

攻撃を行った潜航艇はその後湾外に出て行方が分かりませんでしたが、長い時を経た2006年に、シドニー湾沖合で沈没している姿が発見されました。他の2艇については、1艇が進入の際に防御網に捕らえられ自爆し、もう1艇は豪州海軍の攻撃を受けて沈没し乗員は艇内で自殺を遂げたと記録されています。この2艇については、豪州海軍によって引き揚げられ、速やかに手厚い葬儀が営まれています。そればかりか、沈没し自害した艇の長である松尾中佐の所持物(千人針)が、1968年にオーストラリアを訪問した松尾中佐の御母堂に返還され、豪州海軍による心のこもった対応が日豪両国で大きな反響を呼んだと記録されています。この件については、2002年にオーストラリアを訪問した当時の小泉純一郎総理が、キャンベラのオーストラリア議会で催された昼食会におけるスピーチで、心からの御礼と高い評価を表しています。少し長くなりますが、引用します。

(以下、Australian War Memorial のホームページから引用)

小泉総理:「約60年前、日本の特殊潜航艇、ミジェットサブマリンですかね、シドニー湾にサブマリンが潜航してシドニー湾を攻撃しました。何人かはオーストラリア海軍に捕まり、敵国の兵士として、本来ならば憎しみと敵意を持って遇されるのが、普通の国の態度だと思います。この昼食会が終わってから、キャンベラの戦争博物館にその潜航艇が今でも展示されていると聞いていますが、私はこれから見学に行きます。しかし当時の海軍大将、オーストラリア海軍は、その日本の敵国の兵士に対して、侮辱と敵意ではなくて、勇者として礼節をもって遇しました。当時は海軍として最高の礼節を持った海軍葬をもってその兵士を葬りました。そしてその遺体を日本国に返還しました。約20年後、その亡くなった兵士に対する接し方に対して、母親が、オーストラリア国民に感謝と自分の息子の慰霊に訪れました。当時のオーストラリア国民と時の首相ゴートン首相は、温かくその母親を「勇者の母来たる」と言って歓迎してくれました。敵国の兵士に対してこれほどの礼節と寛大さを持って遇する国民を私は知りません。過去は大事です。過去を忘れることはできませんが、過去の困難を乗り越えて、苦難を乗り越えて、未来に向かって友好関係を築くことが大事であることを身をもって示しているのが豪州と日本の間ではないでしょうか。」(以上引用。)

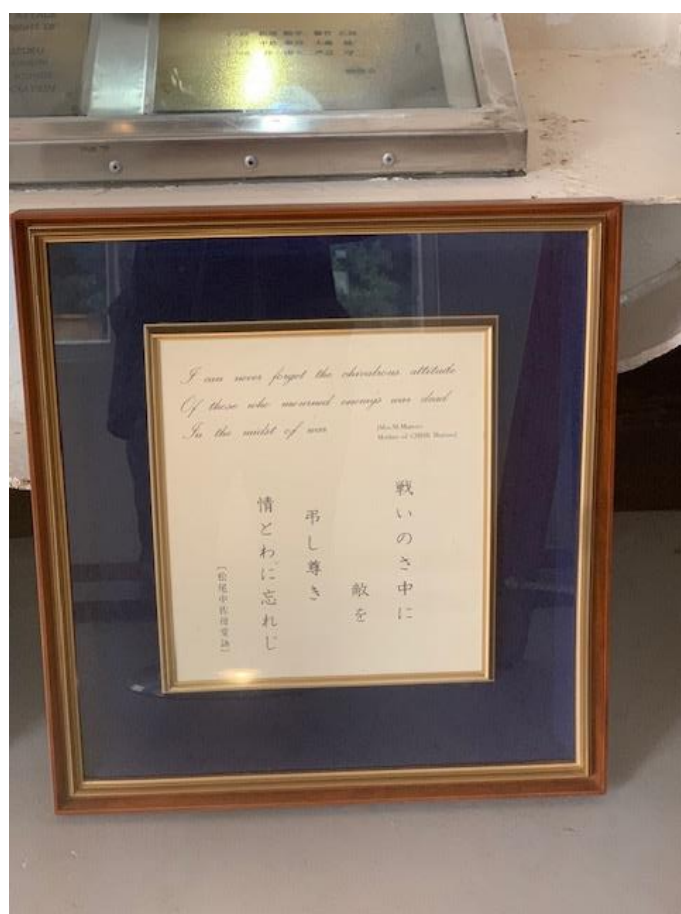


6月1日は、ガーデン・アイランドにあるクッタバル海軍基地で、慰霊式典が行われました。

同基地内にある海軍歴史遺産センター(Navy Heritage Centre)では、引き揚げられた潜水艇の一部とともに、松尾艇長・中佐の御母堂が詠まれた歌と、御母堂が豪州海軍に宛てて篤き御礼の思いをしたためた書簡が丁寧に保管されています。御母堂は、「戦いのさ中に敵を弔いし 尊き情とわに忘れじ」と詠まれました。

小泉純一郎総理と同じ思い、同じ感謝と敬意が、この歌に込められていると思います。

このクッタバル基地には、今でも日本から多くの訪問者が立ち寄り、日豪両国の戦死者を弔っています。



式典では、豪州海軍艦隊司令と私が並んで献花を行いました。献花は基地内にある歴史遺産センターと慰霊碑の二か所で行われました。豪海軍代表が豪州軍及び英国軍の犠牲者を、そして日本海軍の犠牲者についてはシドニー日本人国際学校の生徒が、それぞれ、犠牲者一人一人の名前と階級を読み上げ、ともに犠牲者を弔いました。オーストラリアと日本の国歌が斉唱されました。

6月2日は、グリフィン NSW 州議会議員のイニシアチブによる、ノースヘッドにおける慰霊式典に参加しました。豪州海軍艦艇副司令官が主賓として挨拶を行い、多くの退役軍人とその家族とともに、地元の高校生が多く参加しました。高校生代表による挨拶は、記憶の継承とともに、未来への平和の願いを強調する心のこもったものでした。



ここに至るまでの日豪両国の先人の尽力に改めて深い敬意を表します。その中には、私からこの総領事通信でも紹介した「藤田サルベージ」(第4回)、ポール・グリーン神父及びトニ・グリーン神父兄弟(第5回)の大きな功績も含まれています。

かつては「ANZAC DAY」には日本人コミュニティに対して外出を控えるよう注意喚起をしていた時代もあったと聞きます。旧敵国の日本に対して残る敵意と悪感情が、在留邦人を巻き込む事件を引き起こすことを防ぐためです。

そうした歴史があったことを振り返ればなおさら、これらの慰霊式典は、日豪両国の和解及びその後の良好な協力関係、そして将来にわたる友好の誓いを深く印象付ける、心に残る行事でした。多くの退役軍人の方々から写真撮影を要望された私は幸せだと感じます。両国国民の間の友好的な感情をこれだけの高みに到達させた先人たちの努力のたまものだと思います。

その努力をしっかりと受け止めて次の世代に引き継ぎ、日豪友好を発展させていくことに、私自身も微力ながら携わっていきたいと思います。

(以上)